



★41★

渡辺 大直

岐阜県の農業高校生たちが来てくれた。「『安福』のルーツを訪ねる旅だ」と引率の先生は言う。

彼らは神戸のフルーツフラワーパークで開かれた第100回兵庫県畜産共進会を見学した後、兵庫県を縦断してはるばる但馬牛博物館までやって来た。

『安福』とは1980年に村岡町(現香美町)で生まれ、岐阜県の種雄牛になった牛で、岐阜県の子牛価格を兵庫県のしるまで高め、飛騨牛の名を全国に轟かせた。全国で但馬系といえば、『安福』の子孫と言っほど大きな影響力を持つ伝説の名牛だ。

『安福』は但馬牛の超主流家系の出身なので、岐阜の高校生のために展示物を準備し

たわけではないが、関わる牛の資料は揃っている。

まず、入り口で『安福』の異母弟『谷福土井』の剝製が迎える。展示室の中央にあり、大迫力で目を引く巨大モニュメントは父方祖先の『田尻』だ。そして一番奥にあるのは母『ちずる』や父方祖母『いづみめ』につながる『あつた』の『家系図』だ。さらに『ちずる』の曾祖父『茂金波』の父『茂福』の骨格標本もある。

説明を始める、彼らはメモを取り、スマホで写真を撮ったりしながら、真剣なまなざしで聴いている。彼らがまじめなのか、『安福』という牛がそれほど大きな影響力を残しているのか、ちょっとびっくりした。

今、黒毛和種という品種は、遺伝的単一化という大きな課題に直面している。

直面する遺伝的単一化



「安福」のルーツを訪ねて但馬牛博物館を訪れた岐阜県の農業高校の生徒たち

20年ほど前から『安福』ほか2頭の種雄牛が全国を席巻し、日本中の黒毛和種がこの3頭を祖先に共有するようになった。その結果、この3頭の遺伝子を全く受け継いでいない但馬牛だけがぼつと離れた存在になるほど、黒毛和種の遺伝的な広がりが見失われてしまった。

これが遺伝的単一化だ。この点でも但馬牛は先を行き、痛い目にあってきた。名牛といわれる牛は確かに人間が求める牛の経済性を高めてくれる。しかし半面、その牛の子孫ばかり残り、他の牛が持つ貴重な遺伝子まで失わせてしまつ「もろ刃の剣」でもある。

少々皮肉だが、遺伝的単一化の象徴となつてしまった『田尻』が、プロジェクト「マッピング映像で、遺伝的単一化に対する警鐘と多様化に向けた兵庫県のチャレンジを説明している。

『あつた』の『家系図』を見ていた生徒が、「どうしてこの系図に『田尻』の名が2か所出ているのか」と聞いてきた。『田尻』は、『あつた』の基となった『あつ』という牛の遺伝子を父方と母方の両方から受け継いでいる。この家系図には、父につながる家系と母につながる家系が書かれているので、『田尻』が2か所に出ていることを説明した。

遺伝的単一化は、日本中の研究者や技術者、農家が寄つてたかって、なお解決できていない難しい課題だ。しかし次代を担う若者の頭の片隅にでも残ってくれたら、『田尻』も喜ぶだろう。

■筆者プロフィール■
わたなべ・ひろなお
1954年、新温泉町浜坂出身。県職員として畜産行政に長年携わってきた。県立但馬牧場公園「但馬牛博物館」館長。